
遥か彼方 2

さすらいのかえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙か彼方2

【Nコード】

N8717P

【作者名】

さすらいのかえる

【あらすじ】

『遙か彼方』の続き物で、別視点（主人公は別のキャラクター）の物語です。作者の文章力なく、こちらから読んでもわからない不親切設計ですので、『遙か彼方』を先に読んでもらえると幸いです。そしてもし続きを読みたいと思ってくれた方、今回の主役バンドリーダー俊介のとある不幸な出来事……を読んでもやってください。

その1（前書き）

＊この物語は『遙か彼方』の続編です。未読の方は先に『遙か彼方』を読んでいただけると幸いです。

その1

俺たちは昼飯を食べ終わり自分の教室に向かっていた。

近づいていくと教室の中から険悪な話し声が聞こえてくる。

あ、やばい。隣にいたケイゴがキレるのがわかった。凄い勢いで教室へ入っていく。

教室からケイゴの叫ぶ声が聞こえる。

あゝ過激なことを言ってるよ。

教室のドアが開くとケイゴと黒川飛び出していった。ケイゴに手を握られ引きづられるようにさっていく。

彼らの後姿を見ながらオレは心の中で思う……ケイゴがんばれ。

オレは一緒に居た久志と別れて、教室に入る事にした。

この教室の雰囲気の悪さは何だ……外から聞いて何となくわかってた事だけど悪すぎる。

クラスの女子が一人泣いていた。その子を慰めている女子もいるけど……何かうざい。

泣いてる方の名前は、金城きんじょうだったかな？

オレは彼女がケイゴの事を好きなのを知っていた。

はあゝ。周りに聞こえないように小さくため息をつきつつ自分の席に座った。

授業が早く始まって欲しいなんて、思ったのは初めてかも知れない。

チャイムと 동시에、数学教師の橘先生が入ってくる。

授業が始まって少し経つと教室の雰囲気ふんいきの悪さはいつのまにか無

くなっていた。

そして、授業の終わる間際で、つるちゃんが乱入！！ 橘と何か話をしている。たぶん二人はつるちゃんの所、音楽室へ行ったらしい。

午後の授業が全て終わった。

クラスメイトたちは帰る準備をしているけど、結局二人は教室に戻ってこなかった。

帰りやがったなあいつ。

今日も部活があるというのに……まあしょうがないか、明日どういじめたら……楽しみだ。

オレはクラスメイトたちに挨拶して教室を出て音楽室に向かった。

その1（後書き）

昔に書いた作品のリメイクの何回目？ だろうか、黒歴史的な「遥か彼方2」ですw

自分で言うのもなんですが色々ひどい、でも読みやすくなるだけのリメイクに止めています。今後、時間があれば「遥か彼方3」（一応完結編）とブログへ載せていなかった新作？ 「遥か彼方4？」をアップできたらと思っています。期待せずにお待ちください。

その2

音楽室に向かっていると前に久志が歩いていった。久志は180以上あるので、でかくて目立つ。

「ひさし」

気付いたようだ。

「おう」

話しながら一緒に行く事にするけど、久志は無口なので、オレが一方的に喋る事になる。

「ケイゴ帰ったらしい」

「そうか」

「まあ昼休みの事があるからしようがないけど」

「そうだな」

「明日サボった制裁をしようかと思う」

「……」（黙って頷いている）

「……」

ひさは悪いやつじゃないんだが、話すならケイゴが居ないと辛い。

まあ気を取り直して黙って歩く事にする。沈黙が気まぜくならないのは、久志の凄い所だと思う。

そうこうしていると音楽室に着いた。

「つるちゃん」

と呼びつつそのまま勝手に部室（音楽準備室）に入る。ソファアに座っていた、つるちゃんが怠そうに言った。

「おう、来たか。ケイゴは帰ったぞ」

やっぱり帰っていたか、結局オレが決める事になりそうだけど、久志の方を見ながら言う。

「今日はどうする？」

「俊介に任せる」

予想通り！ ボーカル&ギターで次の曲作りの担当のケイゴが居ないと始まらない。

オレは叫ぶ！！

「今日は休みだ〜こんちきしょ〜」

俺たちは帰る事にした。

久志はバイトを早めにでるからと先に帰った。

オレは明日どうケイゴをいじめるか、つるちゃんと打ち合わせしてから帰る。

ふ、明日が楽しみだ。

その3

あゝこのまま家に帰るには早いなく。放課後の予定がなくなり急に暇になってしまった。

余った時間、何するかは帰りつつ考えようかな。

そんな訳で、オレは学校まで電車通学しているのだけど最寄りの駅まで歩く事にした。

歩いていると、クラスの女子が少し前を歩いているのが見える。

今日、金城を慰めていたやつだ。名前は……忘れた。

のんびり歩いているそいつを抜こうとすると……

「原君」

声をかけられてしまった。舌打ちしそうなのを隠しつつ答える。

「なに？」

自分で言うのもなんだが、そうとう機嫌悪そうに聞こえたと思う。

「高橋君たちがどうなったか知ってる？」

「知らないよ。でも知ってたとしても教える気はない」

「そう」

「何で聞くのそんな事？ そんなに金城が大事なの？」

「べつに、沙織は関係ないよ」

「じゃあなに？」

「君もしつこいね」

「は？ そっちが聞いてきたんだろが」

「言いたくない」

「そうですか」

なんだこいつわけわからね。

「原君は、私の名前知らないでしょ」

「何だよ急に」

「原君、女子たちから評判悪いよ」

「あゝそうですか、別に良いけどね」

オレの返答に対して目の前の女は意外そうな顔をした。

「さっきのは嘘で、クールで格好良いつて皆言ってる」

こいつの意図がさっぱりわからない何でさっき嘘吐いたんだ。

「あっそう」

こんなやり取りをしていたら、いつの間にか駅についていた。

「あ、私の名前は、工藤理恵くどうりえだから憶えておくように」

そう言うと、工藤理恵と名乗った女は自動改札を抜けて下りのホームに駆けていった。

心の中で思う。もう憶えたよ忘れられねーよ。

あと、オレも家の方向下りの電車なんだけど……今ホームに言ったら気まずいだろな。舌打ちしつつ駅から移動する。

この後、オレは近くのゲーセンに行って時間をつぶしてから家に帰った。

何であいつにオレが気を遣わないといけないんだー！！

その4

次の日の朝、学校に来ると次々と俺の所へ「高橋啓吾」情報が飛び込んできた。

なんだかんだで上手くやったらしい……この情報でいじめたる。

ケイゴと黒川と一緒に教室に入ってきた。教室がざわめく。オレも少しビクリだ。

ケイゴは皆に挨拶しながら自分の席に座った。昨日あんな事あったのに全然気にしてないし……黒川は自分の席で本を読み出した。いつもの態勢だ。2人揃って凄い!!

オレはケイゴをいじめる為にケイゴの席へ向かった。

「同伴出勤? ご苦労」

「うあゝなにそのイヤラシク言い方」

核心を突いてみる。

「付き合う事になったのか?」

「べ、別に言いだろ」

まだらしい。心の中で思うさっさと決めろよ。

「さっさと決めろよ」

つい声に出してしまった。

「うるせー」

「わかったよ。2人乗りで来たとか情報があったからついな」

「……」

「まあ授業始まるしこの辺にしとく、部活の時が楽しみだ」

「……」

オレはにやりと笑い、絶句しているケイゴを置いて自分の席に戻った。

昨日のイライラがスッキリした。

自分の席に座ると誰かの視線を感じる、その方向を見ると工藤だった。

目が合うとわざとらしく目をそらす。なんなんだ昨日から。

その5

授業が終わるとオレは部室に向かう。今日は練習できるよ。

ドアを開けて部室に入ると全員揃っていた。オレが一番遅かったようだ……って、ん？ あれ1人多い何で黒川がいるんだ。

「ケイゴなんで黒川いるんだよ」

「けいごにきかないで、私に直接きけば良いじゃない」
ビックリした。めちゃうちゃ黒川が喋っている。

あれ？ オレしかビックリしてないし……気を取り直して。

「じゃあきくけど、なんでいるの？」

「暇つぶし」

「……」

焦り気味にケイゴが説明しだした。

「今日一緒に帰ろうと思って、黒川部活やってないから誘ってみた。まずかったか？」

「いやいいけど……」

「原君で結構ケチだね」

オレのはっきりしない答えが気に触ったらしい。この毒舌の人は誰ですか……。

「居て良い。見学大歓迎!!」

オレはやけくそ気味に言い直した。

つか、さっきからニヤニヤ笑ってるつるちゃんがむかつく。
くそこのポジションはケイゴだったはずだ。

「練習しよう」

絶妙なタイミングで久志が言う。

久志の声を合図に俺たちは練習する事にした。

今回、曲を作る順番だったケイゴが結構良い曲を作ってきた。タイトルは「discipline」だという読みは「ディシプリン」だ。

最後の3文字が気になる。由来には触れない事にした。

演奏していると時間を忘れる。いつの間にか下校時間になっていた。

最後につるちゃんと2人でさんざんケイゴをいじめ。ふ、サボるのが悪い。

そして、俺たちはいつも通りバラバラに帰る事にした……約2名はもちろん一緒に帰るですよ。

その6

オレは帰り道を考えながら歩いていた。それにしても黒川にはビツクリだった。

教室の姿は猫かぶってたんだな。あの2人良い感じだ。

確か久志は3年に彼女がいる。オレだけじゃなかよフリー。1人寂し過ぎ……。

なんか暗くなってきたよ。気分転換が必要だ。

オレは電車に乗ってそのまま家に一旦帰って、ギターを持ってきた駅に向かった。

今日は歌ってやる。オレは路上で歌うのが好きだった。

中学の頃から駅で歌っている。ちなみにオレはバンドではベース担当だがギターも弾ける……というかケイゴより上手いと思う。

オレは、いつものポジションに座り歌いだす。曲はバラバラ、最近のヒットナンバーからオレが生まれる前の曲まで。何人かの人が立ち止まって聴いてくれる。たまにお金をくれる人もいたり。

何曲弾いて歌ったか忘れた頃、目の前に工藤が座っていた。

オレが気付いて歌うのを止めると……

「何で止めるの？原君って歌上手かったんだね」

「おまえの家って、この駅だったの？」

「そうだよ」

全然気付かなかった。この前同じ方向だと気付いてたけど、降りるのも同じだったとは。

「知らなかった。おまえ知ってたの？」

「さっきからおまえ、おまえって名前憶えてって言ったのに」
わざとらしい甘えた声が気になったがオレは言い直す。

「あゝ悪い。工藤は知ってたのオレと同じって」

彼女は嬉しそうに笑った。

「知ってたよ」

彼女は、オレが歌い終わるまで座って聴いていた。

オレがギターをケースにしまい帰ろうとしたら、彼女も立ち上がる。一緒に帰りたらしい。

面倒くさいが、時間も遅いし彼女を送って帰る事にする。

話を聞くと家は結構近いらしい。2人で歩いていると彼女はオレの携帯番号とアドレスを聴いてきた。

「ねえおしえてよ」

「やだ」

即答です！

「へるもんじゃないでしょ」

「へる」

やっぱり即答です！

こんなやり取りが続いたのだが、しつこいので結局アドレスだけ教えた。オレ弱過ぎ。

彼女を家に送ってオレは家に帰った。あゝなんか今日は疲れた。

その7

起きてから、学校へ行くまでに工藤からメールが着まわった。
最初のうちは返事も書いていたが途中から無視していた。

そして教室について、席の近くの友達と話しているとオレと工藤が付き合っているのかきかれた……いつの間にかそんな噂が広がっているらしい。

なんだか嫌な予感がバリバリする。

工藤が教室に入ってきた。俺の席に向かってくる。

「俊介！なんで返事くれないの？」

何だこいつは、なぜ？ 名前呼び捨て周りの視線が強烈だ。

「ちょっとこい」

腕を掴んで強引に教室から連れ出す。

「なに今の呼び方」

笑いながら彼女が言う

「皆の反応凄かったね。これで噂信じそう」

こいつが噂流したのか！？

「おまえ最低」

彼女は急にオレに抱きつくとそのまま唇を奪われた。何なんだ！

「はなれろ」

以外と力強いし。

「やだ、好きなの」

ここで言うのか。さっきから気持ち悪さが限界だ。オレは彼女を強引に突き放して逃げるように走り出す。

「まってよ」

後ろから彼女の泣き声聴こえる。無視する。

自分が最低の人間のような気がした。

オレはそのまま学校を出て、気の向くまま歩き出した。今日はサボり決定だ。

その8

あてもなくぼくと歩いていると、ポケットから電子音が鳴った。
メールの着信音だ……また鳴る……さらに鳴る。

無視して歩くが、五分置きぐらいで鳴っている。いつまで続くんだ？

そして、そのまま歩いていると知らない公園を見付けた。空いていたベンチに、座る事にする。どれくらい時間が経ったろうか着信音がやんだ。

決心してポケットから携帯を取り出してメールの着歴を見る。予想通り工藤の名前がならんでいた。はあゝ読むか。

前半はオレをどう好きになったか書いてあった。後半は罵倒と呪いの言葉が書いてあった。

気持ち悪い……俺は公園のトイレで吐いた。公園の水道で口を漱いでまたベンチに座る。

なにやってんだろ。今日はハードだよ。オレはこんなに他人に想われたのは初だな……嬉しくないけど。

その時、携帯の着信音がした。体が勝手にビクツとなる。苦笑しつつ勢い付けて携帯を見る。ケイゴからのメールだった。力が抜ける。

オレを心配するメールだった。なんだか泣けてきた。

昼の公園のベンチで男子高校生が泣いてるってどうゆう状況だよ。自分に突っ込む。けど泣いたら少しスッキリした。

ケイゴにメールでサボる事と学校に置いたままの鞆の事を伝える。
送信し終わったの確認すると公園の池に携帯を投げ捨てた。

その9

勢いって凄い。オレの携帯成仏してくれ。

池に向かって手を合わせてみる。目の端にゴミ捨てるな!!とかいう看板が見えたような気がする……た、たぶん気のせい。

これからどうしよう。つか、ここ何処だ!!

ぼくと歩いてきたから、場所が分からない。

学校の周辺だと思うが……オレ迷子になってるよ。

携帯がないから時間もわからない……こんなところに影響出るとは!!

まずは公園を出よう。そして目標は駅だね、オレはカンで駅はこっちだと思い歩き出した。

歩いていると、スーツの人やOL風の人とすれ違う。昼休みか？はあく格好悪い感じするが道きくか、歩いてるスーツ姿の兄ちゃんに声をかける。

「すみません」

「ん？」

何か不思議そうな目で見られた。オレ制服姿だよ……忘れてた。駅の事を尋ねると意外と近い事が判明した。オレのカンは当たってた何か嬉しい。お礼を言って別れる。

駅まで歩く、でもどうしよう？

今日は自分の家に帰りたくない。まあ家じゃなくて会いたくないんだけど。

怖い……やば、また気持ち悪くなってきた。オレって弱かったんだな。

駅に着いたが行く場もなくベンチに座って休む。ぼくと何も考えずに座っているといつの間にか周りが少し暗くなってきた。今日のオレはやバいかも。

そんな時……

「原君？」

オレを呼ぶ声が聴こえた。げ、幻聴……じゃなかった……。

目の前に金城が立っていた。

その10

目の前に立っている金城は私服だった。

「何でいるの？」

「それはこっちのセリフだよ」

「金城の家この辺なの？」

「違うけど、原君も違うよね」

「サボりか？」

「原君も？」

オレは笑いながら言う。

「仲間発見だな」

「そうだね」

同意の声に力がない。

金城は、昨日学校休んでたと思う。今日も休んだのか？

何だか元気が無さげだ。

「顔色悪いけど大丈夫？」

逆に心配されてしまった。

「まあまあ」

どう言えば良いだ？ 金城と工藤は友達っぽいしな。

駅の方を見ながら少しそわそわしながら金城が言った。

「私は家に帰るんだけど」

「あ、そうなんだ。さっきも言ったけど家どこなの？」

「高校の近くだよ結構、だから隣の駅で降りるよ」

もうすぐ下校時間なのか？まだクラスのやつとは会いたくないのかな。

あれ？ 何でオレに声かけたんだ？？

「オレも一緒に帰っていい？」

オレは今一人でいるのがいやだった。

「え、いいよ」

金城は少し驚いているようだ。ちゃんと話をしたの今日が初めてだと思う。そりゃビックリするよな。

オレたちは一緒に電車へ乗ることにした。

電車の中では、何を話していいのかわからず2人で黙って座っていた。

でもすぐに金城が降りる駅に着く、オレも使っている高校の近くの駅だ。

「原君じゃあ私降りるから」

そう言うのとホームに降りて行く。オレも金城についてホームを降りる。

「え！ 何で降りてんの？ あゝあゝ」

電車のドアが閉まって発車してしまった。

「原君の家ってもっと先立ったと思うんだけど違った？ どうすんのよー！！」

「……」

どう答えようか……。

「どうしたの？ あ、高校に用あるとか？」

なかなか良い予想だね。でも高校は行くのはさすがに無理だよ。

「一人になりたくなかったもので」

オレの予想外の行動について、うゝと理由を考えている金城の姿が可愛くいて……つい、さらっと本音を言ってしまった。

「うあ。意外だ」

「は？」

「原君でもそういう事言うんだ」

「……」

金城が嬉しそう言う。

「しょうがないな。おねいさんが一緒にいてあげるよ」

何となく腹立つ、けど反論する元気がない。

「じゃあよろしく」

「うあゝ凄いよ」

「え？ 何が凄いの？」

「何でもない。ホームにいてもしょうがないからまずは駅出よう」

話そらしたのバレバレだから、なに照れてんだか。

オレは先に歩き出した金城を追いかけるように歩き出した。

その11

駅を出ると金城が話しかけてきた。

「どこいく？」

「家帰るんじゃないのか」

「私の家に行きたいの？」

何だその疑いの目は……まあ言いたい事はわかるが。

「家に向かいつつ考えよう駄目か」

「いいよ。こっちだから」

そう言うのと、先に金城が歩き出す。オレも後れないように歩く。何となく黙って2人で歩いていると唐突に金城が言った。

「私の家の方って何もないんだよね」

「そう言う事は早く言えよ」

「今更引き返すのもないよね」

「だな」

「私の家に招待してあげるよ」

「親とか居るとめんどくさいからいいよ」

「うち共働きだからまだ平気」

ぶっちゃけてるよ。それは平気なのか？

「余計まずくない？あ、兄妹は居るのか」

「私一人っ子だけど」

「……」

「一人になりたいくないんじゃないの？」

何となくわかった。金城も一人が嫌なんだ。

「招待受けるよ」

そうオレが言うのと、金城が嬉しそうに笑った。ちゃんと笑ったの今日初かな。

「じゃいこう」

オレたちは、金城の家へ行く事にして歩き出した。

その12

オレは金城の少し後ろを付いて歩いている。金城はさっきから黙ったままだ。

暇で何となく周りを見渡すと、何度か歩いた事がある道だと気付いた。

ケイゴの家に行った時に通った道だここ！！ 思い出した。こういうのって少し嬉しい。

「もうすぐ着くよ」

「おう」

オレが自分の記憶力に挑戦している間に家の近くに着いたらしい。

「あそこね」

「え、あのデカイ家？」

金城が指でさしている所と違う近くの家を言ってみた。金城の表情が暗くなった。

「そこは黒川さんの家だよ」

やばい地雷踏んだ！

つかこんな家近かったのかよ……。

絶句しているオレに金城は苦笑しつつ言う。

「置いてくよ」

自分に家に入ってしまった。後れないようにオレも入る。

そのまま金城に付いていくと玄関を上がって、金城の部屋？ に通された。

結構片付いている……ではなく金城さんよ警戒心ゼロですか？

「適当に座っていいよ」

そう言うのとクッションを抱きつつ座る。あ、何か可愛いかも、オレは向かい合うように座った。

金城が唐突に喋りだした。

「このくらい家が近いと聴こえてくるんだ〜いろんな声が」

何の事だ？ 金城は俯きながら涙声で言う。

「結構前から何んだよ。中学の時とか顔赤くしてた時あった……でも泣いているところは見た事なかったんだ」

俯いていた顔を挙げて金城が続けて言う。涙が頬をつたう。

「私は本当は助けたかったのに、でも高橋君と急に仲良くなったりして、凄く嫌だった」

「……」

「何で私はあんな事言っただろう……ごめんなさい」

「オレに謝っても意味ないだろ。遠慮無しに言うとな無神経な事言うやつは嫌いだ。けど後悔してんだろ。あの2人はもう気にしてないだろうし。謝れば良いんじゃない？」

「ほんと遠慮ないよ。原君にまで嫌われてしまった」

「別に嫌ってないけど」

「さっき嫌いって言った」

なに意地になってんだか。

「もう金城はあんなこと言わないだろ？ だから嫌いじゃないよ」

金城が照れ笑いを浮かべつつ言う。

「そっか。泣いてしまったよ」

「良いんじゃない？ 泣きたい時に我慢する事無い」

「聴いてくれてありがとう」

金城が凄く嬉しそうに笑った。

「どういたしまして」

その13

何にか凄い照れくさい事言ってしまった気がする。ハズイな。

金城はさっきまで、あんなに泣いていたのに機嫌よさそう。女つてわかんね。

「次は原君の番だね」

「は!？」

にやりと笑いつつ金城が言う。

「何で一人で居たくなかったの？ その前に何で駅のベンチに座ってたの？ おねいさんに話してみなよ」

「はあ〜それか」

オレがため息吐いた為か急に金城がそわそわしだす。

「無理に喋らなくていいよ。ごめん」

「いや違くて、聴いてくれたら助かるかも、でも金城の友達が関係するからどうしたら良いかと思ってね」

「理恵？」

鋭い！ なんでわかるんだ。

「そうだよ」

「やっぱり。っでなにがあったの？」

オレは学校の帰りに工藤と話した事から、今日の事まで一つ一つ話した。

あ、ヤバイ話していたらまた気持ち悪くなってきた……寒気がする自分の手で肩を抱く。

「っえ」

突然金城に抱きしめられた。びっくりした……。

何か安心するかも……いやいや。や、やばいから、いつまで抱きしめてるつもりだよ？

「……」

「……」

「金城？」

オレは小声で呼んでみる。

金城は顔を真っ赤にしてオレを突き飛ばすように離れた。

ひどいな〜つか笑えてきた。自分から抱きついといてその反応は何だよ。

つばに入ったオレは声を出しておもいきり笑ってしまった。

「笑いすぎだから」

「ごめん。あと、ありがと落ち着いたよ」

金城が気を取り直すように話します。

「……え〜と理恵って昔から凄いモテたみたい。綺麗だしスタイル良いし。ふられた事無いのが自慢だったみたいだよ」

「へー」

金城が可笑しそうに言う

「別に理恵を庇ってるわけじゃないよ。黒川さんを副委員長に推薦したのもたしか理恵中心にやったような」

「そ、そうなんだ」

凄いやつに気に入られたもんだ。はあ〜。

「あいつにもう会いたくない、明日学校行きたくね〜」

「休んじゃえぼ？」

「それだと根本的解決が無い気がするし、あいつに負けた気がする」

「たまには負けたら？」

「そうかもな」

何だか納得してしまった。強がってもしようがないか。いつの間にか外が暗くなっている。

「今何時？」

「あ、8時だね」

「そろそろ帰るよ」

「そっか」

金城が残念そうに言うから……つい頭を撫でてしまった。

「一緒に居てくれてありがとな。助かったよ」

金城は顔が真っ赤だ。オレまで赤面しそうになる。

「その反応なに？ オレまで照れるんだけど」

「うるさ〜い」

その14

オレたちは家から出た。外は真っ暗だ。

心配そうに金城が言う。

「これから何処行くの？」

「あゝここに来る時気付いたんだけど、家近そうだからケイゴのここに行く」

言った後思う。ヤバい禁句だったか？

「そっか」

予想外に金城は笑顔で言った。気にしてないのか？

「じゃオレ行くね。明日学校行くかわからんけど、またあした」

金城も可笑しそうに言う。

「そうだね。私も行くかわかんないけど、また明日ね。なんか駅のベンチでまた会いそうな会話だよ」

オレから言い出した事だけどそれは少し嫌だな……。

「なあ、明日放課後でも良いから学校来いよ。オレも行くから、今日オレに言った事ケイゴと黒川に言えよ」

「でも……」

「オレに言えたんなら、あいつらにも言えるって」

「……」

「学校におまえ居ないとつまんねーよ。一緒に居てくれるんじゃないのかなかったのかよ」

「うん」

金城はそう言って泣き出してしまった。言い過ぎたか??

オレが心配していると、涙声で金城が言った。

「うれし泣きだから心配しないで」

少しほっとする。

「放課後までには必ず行くよ」

「りょうかい。待ってる」

「じゃまたな」

「また明日ね」

「あ、放課後は部屋な」

「わかってるって」

オレはケイゴの家に向かって歩き出した。

少し歩いた後、何となく振り向いてみた。金城が家の前にまだ立っていた。何処かの旅館の女将ですか。

なんだかな〜金城はオレが曲がり角で見えなくなるまで立っていた。

曲がる前に手を振った。見えたかな？

今日はめっちゃ疲れたな〜。明日どうするか考えて歩いていたら、予想してたより早くケイゴの家に着いた。

今日の事どうケイゴに説明しよ〜……そっち先に考えるべきだったか！！ あ〜もうどうにでもなれ、オレはケイゴの家の呼鈴を鳴らした。

<完>

おまけ。次の日の放課後。

「ごめん遅くなった」

「いや、良いよ。じゃ行こうか？」

「う、うん」

金城は凄く不安そうにしている。

「怖い？ 大丈夫だって」

「そうかな？」

「今日俺も怖かったけど、大丈夫だったよ」

「そっか」

金城はそう言ったきり、動こうとしない。オレは金城の手を握り強引に歩き出した。

「わ！ ちよっと」

「いいから行くぞ」

「うん」

オレは部室のドアを開けた。

番外編2

もう少しして高校二年が終わる部室での出来事。

俺は今だに黒川の名前は言えないし告白？　もしていない……どうせ俺はヘタレですよ。

毎日一緒に帰っているのだけど……んーこの話題は変えよう。

最近、あのつるちゃんが来年担任を持つらしいという噂があった。噂が本当か部活の時間に聴いてみた。

「つるちゃん」

「なんだよ」

「来年担任やるってほんと？」

「えーおまえら男子3人ドラフト指名上位な」

「は？」

俊介も会話に入ってきた。

「なんすかそれ？」

「クラスのメンバーは担任が結構自由に決められるんだよ」

「なるほど」

最近では部活の常連になった彼女が言う。

「私はどうなるんです」

つるちゃんが偉そうに宣言した。

「黒川は女子1位だ！　俺のクラスの平均点を上げるの期待大」
この教師は駄目だと思う……。

「逆指名ってないのか？　俺は笹倉センセが良いな」
指名拒否？　勝手に言ってみた。俊介ものってきた。

「国語の有賀が良い」

ちなみに一番若くて綺麗な先生です。

つるちゃんがしょんぼりしている。

「く、黒川はどうなんだ？」

「けいごと一緒なら別にどこでも良い」

す、素で言うかそれゝたまに彼女は凄い事を平気で言う。ハズイ。

「そうか。わかったお前らはセットで俺のクラスだ。そうになると後の2人も一緒だな」

「えゝ」

俊介が抗議の声をあげた。つるちゃんが俊介に何か耳打ちしている。

俊介は納得したようだ。何言ったんだ??

つるちゃんは凄く楽しそうだった。戦力の目処がたって嬉しいのか？

えゝちなみに久志は寝ていた。

終わり。

番外編2（後書き）

完結記念のおまけ的な話でした。続きの「遙か彼方3」は、アップする予定なのでまったりお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8717p/>

遙か彼方2

2011年1月13日00時10分発行